

芭蕉元祿事業 奥の細道むすびの地「大垣」十六万市民俳句ポスト

平成二十九年七月度 入選句（投稿総数三千六句・一般投句数四百九十五句）

特選

子蝻螂構へに隙のなかりけり 愛知県名古屋市 館野 茂子

「子蝻螂」が季語で「夏」である。小さな透き通るような薄緑の子蝻螂は、小さな「鎌」を上下に突き上げているのであろう。まさに「上段」「下段」の構えで隙のない様子をうまく捕らえている。ところで、どのような生き物でも親の姿形を受け継ぐのであるが、あの小さな子蝻螂が、鎌を相手に向けて攻撃の形をつくるということとは、かわいらしい中にほほえみが生まれる。俳諧の「滑稽さ」も詠もうという意味においても、楽しいくである。

五月闇まなこ重たし仁王かな 大垣市 平野 きぬよ

「仁王」というと、筋肉隆々で目を大きく見開いているその姿を思い出す。「まなこ重たし」の中で七で、「あの仁王の目が、今にも瞑つてしまいそうな」そんな仁王があるのかと、疑つてしまう。しかし、季語の「五月闇」は、夏の季語で「五月雨が降り、その暗さ」を表している。この季語が、仁王の眼までも重たくしてしまう。季語が働いている句である。

深く読み取れば、作者が、仁王に重なっているのである。つまり、「五月闇」で、周りは薄暗く、しかも五月雨であるので、うつらうつらとしている作者が目に見えかぶる。

老いて今リボン大きく夏帽子 大垣市 久富 キヌエ

「夏帽子」が、縁の広くて、夏の強い日差しを遮っている。それを被っている作者は、「老いて今」「大きなリボン」をつけて、ウキウキした気持ちである。「老いてなお」ではなく、「老いて今」の「今」に大きな意味があるのである。老いたからこそ、その「今」を楽しむ作者がよく表されている。

秀逸

夏草を分けて陣跡夢の跡 静岡県静岡市 土肥 典子

時の日や叩けば動く古時計 大垣市 棚橋 みさを

見舞客笑顔と西瓜置いてゆく 大垣市 枯れ 尾花

あぢさゐの色薄つすらと退院す 大垣市 浅野 君代

かしわもちつぶ餡がすきもう一つ 大垣市 東山 茂秀

特養の明かり灯りて蛙鳴く 安八郡神戸町 大槻 恭子

学び舎の雑巾かけて夏の蝶 海津市 水谷 勲一

実梅落ち下陰の黙を掻き乱す 岐阜市 堀江 美州

白シヤツの背ふくらんで風走る 揖斐郡揖斐川町 栗野 みねお

伊吹より風の道あり藤の花 大垣市 片山 洋紅

入選

すだれ掛け世俗の音を遠くせり
七変化雨は無数の色と化し
炎昼を引き裂く音の救急車
威勢よく竿の撓りて長良鮎
一つ家に表札ふたつ燕来る
墨俣城梅雨の大河を迎へ討つ
他愛なき兄弟喧嘩柿の花
校庭のビオトープとや蛍狩り
紫陽花や色の数多に時忘れ
南風吹く父祖の地守る女鍬

東京都世田谷区 関戸 信治
大垣市 棚橋 みさを
安八郡神戸町 早津 郁男
愛知県名古屋市 小松 とみゑ
安八郡神戸町 高橋 日出美
愛知県岡崎市 坂元 英征
揖斐郡池田町 木塚 しょう
大垣市 积尼 妙宏
大垣市 ケセラ・セラ
不破郡垂井町 中嶋 笑子

入選

どの草もいつかは花に草紅葉
妻偲ぶ蚊帳の独り寝夜の静寂
行く春や演歌大好き口ずさむ
露座仏に蔭をこぼせり夏木立
初蛍灯りを消して光追う
マンションに風の道あり夏暖簾
我が影の我に隠るる日の盛り
ハンカチを返すあてなき喫茶店
闇といふたのしきものに蛍かな
五月雨や機嫌損ねし山の神

大垣市 高畑 正良
不破郡垂井町 高木 紫雲
大垣市 桐山 敏子
養老郡養老町 田中 紫香
大垣市 新藤 慈子
岐阜市 堀江 美州
大垣市 北浦 典子
栃木県那須塩原市 垣内 孝雄
長野県下伊那郡 長沼 まさし
三重県四日市市 後藤 允孝

選者吟

折り紙の裏の恋文天の川

永山